



Title	葉山嘉樹「死屍を食ふ男」論：豊津、怪談、乱歩
Author(s)	レッキー, リチャード・ウィリアム
Citation	阪大近代文学研究. 2022, 20, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87529
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

葉山嘉樹「死屍を食ふ男」論

——豊津、怪談、乱歩——

レッキー・リチャード・ウィリアム

はじめに

『海に生くる人々』（改造社、一九二六年十月）の刊行から半年後、葉山嘉樹は「死屍を食ふ男」を『新青年』（一九二七年四月増大号）に発表した。娯楽雑誌での発表だったが故に、本作は当時の文壇に黙殺され、研究史においても、単に「葉山嘉樹には珍しい怪奇小説」⁽¹⁾として片付けられてきた。しかし、本作は、葉山が決して多くを語らなかつた故郷の街並みを最も忠実に描いた、生前発表されたもの⁽²⁾の中で唯一、母校を舞台にした作品という点だけを取っても、大きな研究意義を持つている。本稿では、「死屍を食ふ男」の原話である学校怪談、作者の故郷・「豊津」、そして江戸川乱歩の「闇に蠢く」をはじめとする同時代作品との関係を併せて考えることによって、怪奇性ばかりが強調されてきた本作を捉え直し、従来軽視されがちであった葉山文学の一面を明らかにしたい。

一、葉山嘉樹と大衆文学

「淫売婦」（『文芸戦線』一九二五年十一月号）や「セメント樽の中の手紙」（『文芸戦線』一九二六年一月号）をはじめとする葉山初期作品が持つ一種の異様さと、「肉体破砕のイメージ」⁽³⁾とも呼ばれるグロテスクな描写が、日本探偵小説黎明期の作家達の注意を惹いたことは江戸川乱歩の記述から窺うことができる。乱歩は「セメント樽の中の手紙」が特に好きで、「怪奇文学としても優れた作品であつて、その作風に日本探偵作家の傾向と一脈の通ずるものがあつた」⁽⁴⁾。「プロレタリア文学でもあるが、同時にショッキングな怪奇小説でもあり、われわれ探偵作家の注意をひいた作品である」⁽⁵⁾と複数回に亘り言及している。さらに、乱歩は「続・一般文壇と探偵小説」（『宝石』臨時増刊、一九四九年七月）の中で、一九二七（昭和二年）年に『新青年』に作品を発表した一般文壇作家のうち、「葉山嘉樹、石濱金作両氏に

ついては、今も鮮かな記憶がある」とした上で、葉山の「セメント樽の中の手紙」と石濱の「都会の幽霊」(『文芸時代』一九二六年八月号)について次のように書いている。

いづれも広い意味の探偵小説味きわめて濃厚、当時の我々の言葉で云へばモダン・ゴースト・ストーリーに属する怪奇戦慄の作風の非常に優れたものであつて、この二人に探偵小説を書かせなければ嘘だと、私なども編集者に大いに勧めたのであつた。

「セメント樽の中の手紙」に新しい探偵・怪奇小説の可能性を見出した乱歩が編集者の森下雨村や横溝正史に働きかけ、翌年の「死屍を食ふ男」の『新青年』への掲載に直接関与したことになる。

では、葉山は探偵小説についてどう思っていたのであろうか。『葉山嘉樹全集』に収められた創作構想メモの中には、次のような、探偵小説らしきものもある。

ある殺人事件。

Encircled Room 印象派の絵のやうな形と光線とで彩られてゐた。

死体の発見。

その動機——監獄と労働者

人間のコンクリート⁽⁶⁾。

また、葉山は小説「水路」(『改造』一九三五年五月号)の発表に際して、「前々からプロットの有るもの、探偵小説の要素のあるものを書いて見たいと思つてた」と広野八郎宛てに書いている⁽⁷⁾。実際、水路工事をめぐる殺伐とした人間模様を描いた「水路」よりも、一九三〇(昭和五)年六月に日本郵船・龍田丸で起きた殺人事件をミステリー風に虚構化した「優秀船『狸』丸」(『改造』一九三一年四月号)の方が「探偵小説の要素」が強い作品だと思われる。しかし、あくまで要素を含んでいるだけで、本格探偵小説と呼べる作品ではない。

葉山と大衆文学の関係を最も端的に示しているのは、娯楽雑誌『新青年』との関わりであろう。葉山は一九二七(昭和二)年に「死屍を食ふ男」、一九三〇(昭和五)年に「暗い出生」(三月)、一九三六(昭和十一年)年に「航海ランプ」(七月)と九年に亘つて作品を『新青年』に間歇的に発表した。しかし、その数の少なさからも、葉山が一九三六(昭和十一年)年の日記に「新青年から十枚の註文が来た。どうも驚いた」⁽⁸⁾と記していることから、それほど親密な関係ではなかったことが推測される。

葉山が『新青年』に発表した作品は、必ずしも大衆性の強いものではない。「暗い出生」では、赤ん坊の着物に使うた

めの布地を呉服屋から万引きした妊婦が警察に捕まり、留置所の中で子供を産む。一方、「航海ランブ」は、水夫見習が暴風雨の中でランブをマストに掲げることを命じられ、波に浚われそうになる話である。乱歩は「暗い出生」を「軽い意味のプロレタリア犯罪小説」(9)と呼んでおり、「航海ランブ」にはサスペンスの要素が盛り込まれているが、どちらも葉山が他誌に発表した作品とはあまり趣向の変わらないもので、特に『新青年』の性格を考えて書かれたものではないと思われる。一方、学校の怪談を元に書かれ、乱歩が指摘した初期作品の怪奇性を存分に發揮した「死屍を食ふ男」は、葉山の他の作品と趣を異にするもので、『新青年』の趣向に合わせて書かれた可能性が高いと考えられる。本作について、乱歩は「怪奇小説であつて、その筆触鬼気と呼ぶものがあつた」(10)と評価している。

二、「死屍を食ふ男」発表の時代背景

本作が発表されたのは、『海に生くる人々』の刊行から半年後のことで、葉山の人氣がまだ絶頂にあった。一方、前途に既に暗雲が漂い始めていた時期とも言える。「あれには困った、作品が書きにくくてしょうがない」(11)と青野季吉の提唱する目的意識に不満を漏らしていた葉山は、一九二七(昭和二)年に入るとイデオロギーの強い作品をほとんど書かず、自伝的作品やエッセイを多く発表したことでプロレタ

リア文学関係者を失望させたのである。「死屍を食ふ男」も、目的意識の呪縛から逃れる試みの一つとして、一九二七年に書かれたこれらの作品の中で位置づけることができる。

「死屍を食ふ男」の発表月である四月の「新潮合評会」における葉山本人の言説からも、当時の文学的な悩みを推測することができ、目的意識に対する直接的批判は避けているものの、葉山は「小説といふものは理論を最も精密に体系づけるといふことは非常に困難である」と主張し、むしろ「人の感情の方面から這入つて行くといふ必要がある」と述べている。また、「僕は通俗小説は否定しない」とした上で、「通俗小説でも何でも読者があるところの段階に訴へる、その実感を盛り得ればその作品は好い訳なんだ」と主張している。理論で攻める青野と感情に訴える葉山の違いは、「最も困ることは我々は評論を発表するのではなくて、芸術を、小説を発表する」という葉山の言葉に顕著に表れている(12)。

一九二七(昭和二)年は、多くのプロレタリア作家が『新青年』に作品を発表しはじめた年でもあった。『新青年』の発行元・博文館の社員になっていた平林初之輔と「施療室にて」発表直前の平林たい子の諸作の他、村山知義は「巴里」(四月)、林房雄は「初夏の晴衣」(八月)、小堀甚二は「地の底の精神主義者」(八月)を『新青年』に発表した。鮎川哲也はこの現象を、『新青年』の「門戸開放主義ともいふべき編集方針」(13)によるものであると書いている。

この時期のもう一つの傾向として、プロレタリア文学作家たちと『文芸市場』の関わりを挙げることができる。「プロレタリア文芸と共に、変態資料に凝った」⁽¹⁾ 梅原北明が主宰し、金子洋文、村山知義、中野正人等のプロレタリア作家が編集に携わった『文芸市場』は、プロレタリア文学、新感覚派、ダダイズムなどの反体制文学だけではなく、妖怪や魔窟などの変態資料にも誌面を割いた文芸誌である。一九二七（昭和二）年に入ると、『文芸市場』は中野正人の編集の元でプロレタリア文学雑誌に変容を遂げ、同年五月まではその代表的雑誌の一つであった。金子や村山の比ではないにしろ、葉山嘉樹も「春の悩み」（一九二六年五月）、「刺された男」（同年十月）を発表するなど、本誌とそれなりに積極的な関わりを見せた。掲載誌が違うとは言え、「死屍を食ふ男」が屍肉食という、いわゆる「変態心理」を題材にしているところに、変態資料の発表誌でもあった『文芸市場』の影響を感じるのとはあながち間違いではなからう。同時期に執筆・発表された葉山の「狂気」（『文芸戦線』一九二七年二月号）でも長い監獄生活で発狂した囚人の奇行が描かれており、やはり変態心理が題材となっている。

葉山の作家的な歩み、『新青年』との関わり、そして『文芸市場』の変態資料の影響。「死屍を食ふ男」が、こうした内外の状況と密接に関わっていることは間違いない。その実態をより具体的に考察するために、本稿では、本作の原話で

ある怪談、舞台である葉山の故郷・豊津、そして乱歩の影響に焦点を当てて論じることにした。

三、「死屍を食ふ男」の原話

「死屍を食ふ男」は、江戸川乱歩の「パノラマ島奇譚」、萩原朔太郎の「死なない蝟」、他十四作と共に『新青年』一九二七（昭和二）年四月増大号に掲載された。そのあらすじは次の通りである。

寂びれた村の、山の中の中学校。年に一度、生徒が近くの湖で溺れるという謎の溺死事件が起きていた。安岡と深谷は寄宿舎の同じ部屋で過ごしていた。安岡は、夜中に外出する深谷を不審に思い、その後を尾けることにする。湖の南側の墓地で、深谷が墓を暴いて死肉を食べているところを安岡が目撃してしまう。その後、安岡はショックで寝込んで病死してしまい、深谷は行方不明になって数日後に水死体で見つかる。

本作のクライマックスでは、深谷が墓を暴いて死体の腕にかぶりつく場面が描かれている。しかし、この展開は決して葉山が考え出した新しいものではなかった。結核を患った学生が墓を暴き、「肺病に効く」と信じられた人骨を食べているところを寄宿舎の同室生に見られてしまう、という怪談が当時、日本中に広まっていたようなのである。

ここで、松谷みよこが「おまえ見たな」というタイトルで

『現代民話考』に収めたバージョンを紹介したい。

ある夜、明道学寮の一室でひとりの学生が目覚ますと、隣のAがいない。気にもせずにその夜は寝たが、次の夜も次の夜もいない。その学生は室長だったので気になり、ある夜、寝ずに様子をうかがい、Aが出て行く後をつけて行つた。Aは渡り廊下をわたって便所に入つた。なんだ、やはり便所かと苦笑したが、いつになつても出てこない。戸をたたいても返事がない。とうとうあけてみた。便所はもぬけのからであつた。窓があいている。

窓からのぞいた室長はぎよつとした。隣は墓地だつた。Aは墓の間にしやがみ、何かにかぶりついている。人の気配を感じたのかAがふり返つた。口にくわえていたものは骨だつた。

室長は部屋に逃げかえり、ふとんをかぶっていたが、そこへ足音が近付いてAが帰つてきた。Aは室に寝ている友人の上に、つぎつぎと馬乗りになつて息をかいでいたが、室長のところへくると冷たい手で室長の首をしめながらささやいた。「おまえ、見たな」

おそろしさに、室長は気を失い、高熱を出して寝こんだ。ようやくなおつた時、Aが中庭の柳の枝で首をくくつたことを知つた。Aは結核を直そうと人骨を食つていたのであつた⁽¹⁵⁾。

これは「福井県の福井師範学校に語り継がれた話」と紹介されているが、よく似た怪談は、本研究だけでも青森県⁽¹⁶⁾から福岡県⁽¹⁷⁾まで確認されており、日本全国に広まっていたと思われる。なお、この怪談は少なくとも明治末⁽¹⁸⁾から昭和二十年代⁽¹⁹⁾まで語り継がれたようである。戦後に入ると子供達の結核の認識が薄れ、墓荒らしの犯人は肺病の学生から山姥などに変わつていった。この新バージョンは、一九八五（昭和六十）年に実施した中学生アンケートでも確認されている⁽²⁰⁾。

松谷みよ子は前述の『現代民話考』でこの怪談の様々なバリエーションを紹介している。主なものは、次の通りである。

- ①（Aの病気について）
 - ・ Aは肺病・結核を患っていた。（これは圧倒的に多いようである。）
 - ・ Aはハンセン病を患っていた。
- ②（Aの行為について）
 - ・ Aは人骨を食べて・しゃぶっていた。
 - ・ Aは死肉を食べていた。
 - ・ Aは死体の血を吸っていた。
- ③（話の結末について）
 - ・ 室長は高熱を出し、あるいは病気になる、Aは自殺した。

・室長は高熱を出し、あるいは病気になる、Aは結核で死んだ。

・二人とも死体で見つかった。

一九六六（昭和四十一）年に、この怪談は「アミダ寺の怪」というタイトルで『河北新報』の「郷土の怪談」シリーズ（七月二十六日より十五回連載）に載り、一九七〇年代の怪談ブームをきっかけに、「おまえ見たな」「骨しゃぶり」などのタイトルで多くの怪談集と民話集に収められるようになった。一方、国内外邦字新聞に掲載された怪談・妖怪事件の記事を蒐集した『明治期怪異妖怪記事資料集成』（湯本豪一編、国書刊行会、二〇〇九年）と『大正期怪異妖怪記事資料集成』（同、二〇一四年）に本話が載っていないことから、当時はほとんど文章化されなかったことが推測される。すなわち、「死屍を食ふ男」が文章化のかなり早い例である可能性が考えられる。葉山は「肺病」という言葉を使わず、「色の青白い、瘠せた、胸の薄い」と遠回しに書いているだけだが、『新青年』の読者の多くが元の怪談を知っており、それを読んだだけで、深谷が肺病であることが分かったと思われる。

四、「死屍を食ふ男」における豊津描写

本作の舞台となっている村は、「山中の一村」と書かれているだけで、名前は明かされていない。しかし、葉山自身の故郷である福岡県京都郡豊津村（一九五五年に豊津町、二〇〇六年にみやこ町と合併改名）がこの村のモデルになっていることが、葉山研究者の共通した見方である。なお、葉山自身が出た中学校とその周辺がかなり忠実に描写されている。

中学校は山の中にあつた。運動場は代々木の練兵場ほど広くて、一方は県社〇〇神社に続いており、一方は聖徳太子の建立に係ると云はれる国分寺に続いてゐた。そして又一方は湖になつてゐて「中略」その湖の岸の北側には屠殺場があつて、南側には墓地があつた。

ここに描かれた学校とその周辺風景のほとんどは実際に存在する、あるいは存在したものである。浅田隆は『葉山嘉樹論——「海に生くる人々」をめぐる——』の中でこのことを初めて指摘したが、浅田は文末注で『「湖」は巢島池、『〇〇神社』は小笠原神社である』²¹と書いているだけで、詳しく述べているわけではない。浅田論の不足点を補うべく、この度は育徳館の校長（当時）・小正路淑泰氏とみやこ町歴史民俗博物館学芸員・木村達美氏のご協力の下でみやこ町の

現地調査を行い、本作に出てくるほぼ全ての場所を特定することができた。その結果、以下の六つのことが明らかになった。

①〈中学校〉とは、一八六九（明治二）年に豊津藩の藩校として創立された育徳館のことである。その後、育徳館は藩校から県立中学校に変わり、一九〇一（明治三十四）年に「福岡県立豊津中学校」と改称されたが、葉山は一九一三（大正二）年にこの学校を卒業している。（現校名は、福岡県立育徳館中学校・高等学校。）なお、安岡と深谷が住む寮とよく似た「二階建寄宿舎」が、一九〇四（明治三十七）年頃に作成された「福岡県立豊津中学校校舎配置図」⁽²²⁾に記載されている。

②〈○○○神社〉は、浅田氏の指摘通り、一八九〇（明治二十三）年に県社に指定された小笠原神社を指す。

③〈国分寺〉とは豊前国分寺のことである。五重塔ではなく、三重塔が立っている。

④〈湖〉は浅田氏の指摘通り、巢鳥池を指す。一九二九（昭和四）年まで、豊津中学校（育徳館）の水泳の練習は巢鳥池で行われ、水難事故が数回起きたという⁽²³⁾。

⑤〈墓地〉は、豊津中学校（育徳館）の近くに位置するものだと思う。この墓地に正式呼称はないが、地元の人には「上坂の墓地」と呼んでいるそうである⁽²⁴⁾。中学校からの直線距離は四百メートル強、安岡と深谷が歩いた想定コース

を検討すると五百メートル強になる。

⑥〈屠殺場〉は現存しないが、松井斌二が一九一六（大正五）年に編纂した豊津の地誌『龍吟成夢付録・豊津略誌』⁽²⁵⁾には、台ヶ原旧上坂町にあった「旧屠牛所」に関する記述が見られる。屠殺場があった正確な場所は定かではないが、「上坂の墓地」の近くにあったこと、そして葉山の子供時代に営業していたことは間違いないようである。なお、同じ豊津出身の堺利彦は、『堺利彦伝』の中でこの屠牛所について書いている。

台ヶ原に屠牛所が作られていた。中学校の昼休みに、その屠殺を見に行つて目かくしをされた牛が、額のまつ正面を鉄の槌で打ちおろされ、ゴトゴトと足踏みをしてドタリと倒れたのを見て、非常にいやな気持ちしたが、それでもやはり肉はうまかつた⁽²⁶⁾。

次に、「死屍を食ふ男」における豊津の歴史に関する記述を見ることとしよう。

その中学のある村が、栓を抜いた風呂桶の水のやうに人口が減り初めた。残つてゐる者は旧藩の士族で、いくつかの恩給を貰つてゐる廢吏ばかりになつた。

何故かなら、その村は、殿様が追ひ詰められた時に、

逃げ込んで無理に拵へた山中の一村であつたから、何にも産業と云ふものが無かつた。

で、中学の存在によつて引き止めやうとしたが、困つた事には中学がその地方十里以内の地域に一度に七つも創立された。

ここに書かれているのは、まさしく豊津の歴史である。一八六六（慶応二）年の第二次長州征討で、小倉藩が長州藩との戦いに敗れると、藩主の小笠原氏は自ら小倉城に火を放つて敗走した。その後、小笠原藩は一八六七（慶応三）年に藩庁が香春に移つて香春藩に変わり、一八六九（明治二）年に豊津へ移転して豊津藩となつた。廃藩置県により、豊津藩は一八七一（明治四）年に豊津県になつたが、たつた四ヶ月後に小倉県に合併統合され、一八七六（明治九）年に福岡県に編入された。これといつて産業もなく、藩庁所在地だけが存在意義の豊津がこうして影響力を失うと人口流出が始まり、小笠原氏ゆかりの士族だけが残つたのだが、葉山本人もその子孫に当たる。

また、福岡県下には元々、育徳館と修猷館という二つの中学校しかなかったが、炭鉱で大儲けした蔵内次郎作が一九〇八（明治四十一）年の衆議院議員総選挙に当選し、「殆んどありとあらゆる村に中学を寄附した」歴史も書かれている。

以上のような豊津描写を受けて、浅田隆は「死屍を食ふ

男」を、「学校の寄宿舎などによくある怪談ものを豊津中学に置きかえたにすぎないような作品」と片付けている⁽²⁷⁾。しかし、果して本当にそうであろうか。「死屍を食ふ男」の掲載誌である『新青年』とその作家たちに目を向け、本作の見落とされた側面を探りたい。

五、「闇に蠢く」等の影響

浦西和彦と浅田隆をはじめとする葉山研究者は、これまで「死屍を食ふ男」における豊津描写のみに作家論的な興味を示し、それ以上の考察を展開しなかつた。本論では、葉山嘉樹という作家から一旦離れ、〈食人〉のテーマを扱つた同時代の大衆文学作品に着目したい。「死屍を食ふ男」を、病気や「肉体破碎」を描いた葉山の初期作品の中に位置づけることができると同時に、当時の探偵小説の流れの中で捉えることも可能なのである。

原田洋将の研究によると、「死屍を食ふ男」が書かれた当時は「生理的嫌悪感を抱きかねないグロテスクなテーマこそが、人々からの喝采を以て迎え入れられた」時期で、『新青年』の誌面には『食人』というグロテスクなテーマに対する人々の興味を惹きつけるような意図が題から感じられる作品が散見する」のであつた⁽²⁸⁾。原田は、小酒井不木が「殺人論」(『新青年』一九二三年三月十一月号)の中で「食人の風俗」や「人肉に対する異嗜」について書いたことを流行の

起源とし、食人を題材にした探偵小説の例として、江戸川乱歩「闇に蠢く」(『苦楽』一九二六年十一月号、『現代大衆文学全集 第三巻 江戸川乱歩集』(平凡社、一九二七年十月)にて完結)、水谷準「恋人を喰べる話」(『探偵趣味』一九二六年十月号)、瀬尾アキ夫「恋人を喰ふ」(『探偵趣味』一九二八年五月号)、夢野久作「人間詰物」(『新青年』一九三六年三月号)の四作を挙げている。この中で「死屍を食ふ男」より前に書かれ、本作に何等かの影響を与えた可能性があると考えられるものは、水谷準の「恋人を喰べる話」と乱歩の「闇に蠢く」である。

「恋人を喰べる話」は、的場悠助という男が恋人の百合亜を意図せず殺してしまい、その墓標となっている無花果の木の実を、「僕は百合亜の肉を食つてゐるのだ」と恍惚として食べる話である。この作品で描かれているのは本当の食人ではないが、病に冒され「死ぬ五六日前」の的場悠助が「枕元に座つた」友人に「恋人を喰べる話」を聞かせるという設定は、安岡が「臨終の枕頭の親友」に「屍を食ふのを見た一場を物語」る「死屍を食ふ男」の終わりの場面とよく似ている。しかし、「死屍を食ふ男」と紛れもない類似性を持つのは、この作品よりもむしろ乱歩の「闇に蠢く」である。

「怪奇探偵」小説と呼ばれた⁽²⁹⁾「闇に蠢く」は、乱歩にとつて初めての長編・連載小説で、生き延びるために人肉を食べた者がその味を忘れられず、殺人や屍肉食をするという

「人肉に対する異嗜」を描いた作品である。病氣治療を目的とした「死屍を食ふ男」の原話の屍肉食とは性質が大きく異なるが、前半で溺死事件を描き、後半で食人事件を描く点においてはこの二作の構成が酷似している。

「闇に蠢く」では、洋画家の野崎三郎は、恋人のお蝶を連れて信濃のS温泉の靄山ホテルを訪れる。しかし、二人が近くの森で隠れん坊をしている最中にお蝶は姿を消し、履いていた草履の片方は大きな沼の縁に、もう一方は沼の水面に浮いているのが見つかる。

お蝶の隠れ場所が見つからず、三郎の遊び心が恐怖心に変わる場面は、野球のセコチャンが水中に潜り、野球部の仲間「賞賛の声、羨望の声が、恐怖の叫びに変」る「死屍を食ふ男」の場面とよく似ている。また、「死屍を食ふ男」では「屠牛所の生血の祟りがあの湖にはある」と噂されているのと同様、「闇に蠢く」の沼は「底なしの沼だ相で、その上、蛇身の主がゐて、それに見込まれたら、どんな泳ぎの名人でも、逆も助かることは出来ない」と言われている。

二作で用いられている表現を見ても、乱歩の「沼は相変わらず、無表情に黙りこくつて、ドンヨリ曇つた空を映してゐた」と、葉山の「湖は、底もなく澄み亘つた空を映して、魔の色を益々濃くした」という水面描写には、曇りと晴れの違いはあるにせよ類似性が顕著である。安岡が深谷の後を尾けて墓地に向かう「死屍を食ふ男」の後半の場面では、セコチ

ヤンを「呑み殺した湖」が「セコチャンが溺死した沼」に変わり、「沼の表」が「曇った空を映」す描写が書かれている。「闇に蠢く」の後半では、靄山ホテルの主人が「人肉に対する異嗜」の持ち主であることが判明し、洞窟に閉じ込められた野崎三郎も人肉を食べて飢えを凌ぐ羽目になる。「闇に蠢く」の連載期間が「死屍を食ふ男」の執筆時期に近いことを考えると、溺死事件に始まって食人事件に終わるこの二作の類似点をただの偶然の一致とは言えなさそうである。

六、安岡と深谷の分身関係

単行本収録時に補完された「闇に蠢く」の終わりの部分では、お蝶が溺死したのではなく、靄山ホテルの主人によつて匿われていたことが判明する。そして、同じ「人肉に対する異嗜」を覚えた野崎三郎は、病死したお蝶が眠る墓地で行方を晦ましていたホテル主人と対面し、お蝶の死体をめぐる争奪戦が始まる。二人の対決は描かれていないが、その翌朝に心臓をえぐられたお蝶、喉首を噛み砕かれたホテル主人、そして首をくくった野崎三郎の三死体で墓地の中で発見される。この補完分は「死屍を食ふ男」の半年後に発表されたので、葉山の小説に直接影響を与えた可能性はないが、墓地の中の土壇場といい、二人が死ぬ終わり方といい、多くの共通点がある。乱歩研究者の宮本和歌子は、「闇に蠢く」の野崎三郎とホテル主人のこの関係に一人二役的なところがあると主

張している⁽³⁰⁾。

宮本氏は、乱歩作品における一人二役トリックや登場人物の一人二役関係を数多く紹介しているが、大正末期の乱歩作品には〈夢遊病〉〈離魂病〉による一人二役の例が複数見られると指摘している。夢遊病を扱った作品として「二魔人」『新青年』一九二四年六月号）と「夢遊病者彦太郎の死」『苦楽』一九二五年七月号）は有名だが、「二魔人」の中で「夢中遊行、離魂病、夢中の犯罪」は類似現象として挙げられている⁽³¹⁾。乱歩は『幻影城』の「怪談入門」の中で、東洋における分身怪談の原形が離魂病であると述べ、中国の例として『搜神後記』卷三の「宋時有一人云々」、日本の例として『一夜舟』卷三の「離魂病の娘」と『奥州波奈志』の「影の病」を紹介している⁽³²⁾。宮本氏は離魂病を「今でいうところのドッペルゲンガーや幽体離脱のようなもの」と説明しているが、自分と全く同じ姿をした人と遭遇し、後に「訳のわからぬ病氣にかかつて死亡する」のがその典型的な例である。

「闇に蠢く」の野崎三郎とホテル主人は、見た目こそ似ていないものの、「食人行為という点」においては「相似形」をなしており、「二人の相似は、お蝶の墓を暴く場面で最高潮に達する」と宮本氏は主張している。野崎は「同病者」のホテル主人を「いわば自分の分身と見ており」、その分身を「殺してしまったため、自分も必然的に死ぬことにな」る。

自分の分身を殺した野崎が死ぬ「闇に蠢く」の物語は、「自分の分身を目撃した者が死ぬ」離魂病伝説を元に行っていると宮本氏は述べている。

では、「死屍を食ふ男」の場合はどうであろうか。原話「おまえ見たな」にはない本作の特徴の一つが、登場人物「安岡」と「深谷」の人物形成にあると言えよう。小説の始めでは、寄宿生の少なさを「淋しく」「心細く」思う安岡と、「出来る事ならば、その室に一人で居たかった」「人間嫌ひな」深谷は、対照的な人物のように紹介されている。しかし、野球のセコチャンの溺死を機に、安岡は神経衰弱に陥り、深刻な不眠症に悩まされる。ここから二人の運命は、絡み合っていくことになる。

夜になると、安岡は「発育の不充分な、病身で内気で、たとひ女の方から云ひ寄せられたにしても、嫌悪の感を抱く」深谷の臆病さ、「機械体操では、金棒に尻上りも出来ない」深谷の弱々しさなど、「次から次へと深谷の事について考へ」る。さらに、安岡は「俺は神経衰弱をやつてゐるんだ。幻だ。夢だ。錯覚なんだ」と自分の正気を時々疑うようになる。深谷の人物像は主に安岡の目を通して描かれているが、その客観性と信憑性はこの時点で既に疑わざるを得ない。

クライマックスの場面では、「松林の間を、忍術使ひでもあるやうに、フワフワと然も早く飛んで」、「野球のチャンが二人で漸く載つける事が出来た、仮の墓石」を軽々と持ち

上げる深谷が神がかった俊足と怪力の持ち主として描かれているのは、安岡の病んだ神経による錯覚だとも考えられる。また、安岡がそのような深谷の「身軽さが伝染しでもしたやうに、風のやうに深谷の後を」墓地まで追いかける場面や、「どうして、寄宿舎に帰つたか自分でも知らなかつた」ところを考えると、彼の妄想あるいは夢の中での出来事とも解釈することができると。

その翌朝、深谷は「君は、昨夜、何か見なかつたかい？」と安岡に訊き、安岡は「いいや。何も見なかつた」と答える。すると、深谷は、「君の口の周りは、全で死屍でも食つたやうに、泥だらけだよ」と静かに言う。深谷のこの言葉は、安岡の恐怖を煽るためのもので、原話の「おまえ見たな」に代わる台詞と考えるべきであろう。安岡の口の周りに泥が付いているのは、彼が墓地で「叫ぶまいとして、いきなり地面に口を押しつけた」ためで、死屍を食つたためではない筈である。それでも、口の周りに土をつけた安岡の姿には、まるで深谷と人格が入れ替わつたやうな不気味さがある。その後、安岡は「病名が判然しな」い病気に罹り、二人は別の場所ですべて同時に死を遂げる。「訳のわからぬ病氣にかかつて死亡する」離魂病と同様の死に方である。

このように、「死屍を食ふ男」にも夢遊病や離魂病を思わせる要素があり、広義の分身怪談として読むことは可能である。「闇に蠢く」では、野崎三郎とホテル主人は「人肉に対

する異嗜」という〈病〉を共有する故に分身関係が成立すると宮本氏は書いている。同病ではないにしろ、「死屍を食ふ男」に登場する肺病の深谷と神経病の安岡も〈病〉によって結ばれていると言えよう。そして、小説の始めでは深谷の病弱さの原因を知らなかった安岡と、安岡の不眠症については「口を緘してゐた」深谷が、墓地でその〈病〉を共有することになる。セコチャンが溺れた沼に近づくとき「自分が溺死しかけてでもゐるやうな恐怖に囚はれ」るほど神経が過敏になっている安岡は、深谷の屍肉食を目の当たりにし、「土には全でそれが腐屍でもあるやうに、臭気があるやうに感じ」る。つまり、「死屍を食ふ」体験を共有してしまうのである。一方、深谷も、「死屍でも食つたやうに」泥だらけになった安岡に、屍肉食をした自分の姿を見てしまう。この離魂病的体験により、二人の運命は死に向かつていく。なお、死体となって「汀に打ち上げられ」る深谷の最期は、病気を苦にした入水自殺とも考えられるが、その死因は野球のセコチャンと同じ溺死と思われるもので、セコチャン、深谷、安岡の三人の間に何らかの因縁があったことが示唆されている。

七、「死屍を食ふ男」における〈伝承〉のテーマ

このように、「死屍を食ふ男」のクライマックスは怪談「おまえ見たな」とほぼ同じだが、その構成はむしろ「闇に蠢く」の連載分を意識したものである可能性が高い。この二

つの異なった要素を繋ぐ接着剤のような役割を担っているのは、〈豊津〉という空間である。葉山は「おまえ見たな」の学校に母校の育徳館を用い、お蝶が沼のほとりで失踪する「闇に蠢く」の場面を、育徳館の学生が巣鳥池で水泳中に溺れるという場面に置き換えた。「闇に蠢く」の構成が「死屍を食ふ男」の〈骨組〉で、一人二役や離魂病のテーマがその中に組み込まれた〈柱〉であるとすれば、豊津描写はその柱と連結して、学校怪談「おまえ見たな」の事件を主軸とした物語展開を支える〈梁〉の役割を担っていると言えよう。

しかし、「死屍を食ふ男」はただ単に「闇に蠢く」と「おまえ見たな」の物語を合体させ、舞台を豊津に移しただけの作品ではない。他人の噂や自分の狭い見聞を安易に信じることへの戒めが、先行物語にはない独自のテーマとなっている。「色んな事を知らない方がいゝ」から始まる冒頭部分では、「新聞の『その日の運勢』の内容が気になる人」と、「あそこの家の屋根からは、毎晩人魂が飛ぶ」という噂を聞いて「夜になるとそこを通らない」人、つまり古いや俗信に翻弄される例が紹介されている。その後、「野球のセコチャン」が溺死し、中学校は「屠牛所の生血の祟りがあの湖にはあるのだらう」という「噂で持ち切り」になる。つまり、少年の事故死の事実は、屠殺場への差別によって歪められ、「屠牛所の生血の祟り」という怖い〈噂〉と化していくのである。

そして、「人間の骨は肺結核に効く」という迷信に翻弄さ

れ異常行動に出た深谷の姿を、神經衰弱と不眠症により精神を不安定にした安岡が目撃し、「死屍を食ふ男」の物語が生まれる。

安岡は故郷のあらゆる医師の立会診断でも病名が判然しなかった。臨終の枕頭の親友に彼は云った。

「僕の病源は僕丈けが知つてゐる。」

かう云つて、切れ切れない言葉で彼は屍を食ふのを見た一場を物語つた。そして忌はしい世に別れを告げてしまつた。

こうして安岡は、親友に「死屍を食ふ男」の物語を伝えて死ぬ。安岡の誤解と病氣によつて歪曲されたこの物語は、人の口から人の口へと広まり、伝承されていくだろう。そして最後に活字となつて、小説「死屍を食ふ男」として我々読者の目に触れるのである。

冒頭の「人魂」、前半の「屠牛所の生血の祟り」、そして後半の「死屍を食ふ男」。三つとも〈伝承〉であり、〈怪談〉でもある。安岡が深谷を墓地まで追いかける場面では、「セコチャンが溺死した沼の方へと飛んだ」「生きた人魂のやうに二人は飛んでゐた」といった表現は読者に前半事件を想起させ、クライマックスの墓地事件と結びつけて考えさせる効果をもたらしめている。この三怪談が生まれ語られる伝承のプロ

セスを伝えるところに、本作の眞の独自性があると言えよう。しかし、この作品は大きな矛盾点を孕んでいる。安岡と深谷の離魂病的とも言える分身関係が浮かび上がり、二人がほぼ同時に死ぬ本作の終わりでは、説明のつかない超自然現象が強く示唆されているのである。葉山は本作の「合理的な」冒頭と「非合理的な」末尾の矛盾を解決しようとせず、むしろ結末に謎を残して読者の解釈に委ねている。

おわりに

『海に生くる人々』刊行直後の過剰な期待と「目的意識」の呪縛に嫌気が差した一九二七（昭和二）年の葉山嘉樹は、怪談「おまえ見たな」を元に書いた「死屍を食ふ男」を娯楽雑誌『新青年』に発表し、掲載誌の性格を反映した異色な作風に仕上げた。その作風には『食人』というグロテスクなテーマを扱った当時の探偵小説と、離魂病や夢遊病のような一人二役的なテーマを扱った乱歩作品の影響を見ることが出来る⁽³³⁾。なお、本作は単なる怪談の文章化に留まらず、怪談というものがどのようにして生成され、どのようにして伝承されるかという新テーマにも挑んだ作品であると考えられる。

「死屍を食ふ男」が怪奇小説として成功しているかどうかは議論の余地がある。「おまえ見たな」と同じ型の怪談が日本各地に存在した発表当時の方が、むしろ今より本作の意外

性が薄かったろう。前述の「続・一般文壇と探偵小説」の中で、乱歩は葉山の「セメント樽の中の手紙」と石濱金作の「都会の幽霊」を高く評価した後、「しかし両氏が『新青年』に書いたのはこの二作ほど人を打つものではなかったように記憶してゐる」と書いている。「鬼気を呼ぶ」葉山の文体を評価する一方で、「セメント樽の中の手紙」を読んで全く新しいタイプの怪奇小説の出現に期待した乱歩が、彼自身の「闇に蠢く」の構成を借用し、既存の学校怪談を小説化した「死屍を食ふ男」にいささか失望したのは想像に難くない。同年生まれでありながら生前の葉山とは会ったことがなかった、と乱歩が書いていることから、本作が二人の直接交流に繋がらなかったのも明らかである⁽³⁴⁾。

それにしても、「死屍を食ふ男」は葉山文学の流れから見ても、文学史の流れから見ても、確かな意義を持つ作品である。葉山が書いた唯一の怪奇小説、あるいは故郷の豊津を描いた数少ない作品の一つとして、従来のプロレタリア文学の枠に囚われない魅力を本作に感じることができる。一方、乱歩が『新青年』編集部に働きかけ掲載を実現させ、葉山が乱歩作品を撰取して書いたと思われる「死屍を食ふ男」は、当時のプロレタリア文壇と探偵小説壇をそれぞれ代表するこの二作家の関係を裏付けけるものとして、文学史的な意義が大きいと言えよう。

注

- (1) 浦西和彦「書評 浅田隆著『葉山嘉樹論——「海に生くる人々」をめぐる』」（立命館大学『論究日本文学』一九七九年五月 第四十二号）。
- (2) 母校を舞台とした未発表作品「中学校事件」（『赤土』二〇一九年三月 第四十八号）がある。
- (3) 平岡敏夫「肉体破砕のイメージ——葉山嘉樹論」（『日本文学研究』一九六八年二月号）。
- (4) 江戸川乱歩「日本の探偵小説」。初出は江戸川乱歩編『日本探偵小説傑作集』（春秋社、一九三五年九月）、引用は『江戸川乱歩全集第十六巻 鬼の言葉』（講談社、一九七九年、二一七頁）に拠った。
- (5) 江戸川乱歩「プロレタリア怪奇文学」（『宝石』一九五七年九月号）。
- (6) 「創作構想メモ」（『葉山嘉樹全集 第六巻』筑摩書房、一九七六年、三五七頁）。
- (7) 広野八郎宛書簡、一九三五（昭和十）年五月五日（『葉山嘉樹全集 第六巻』筑摩書房、一九七六年、四六六頁）。
- (8) 葉山嘉樹日記、一九三六（昭和十一年）年四月三十日（『葉山嘉樹日記』筑摩書房、一九七一年、三〇二頁）。
- (9) 4に同じ。
- (10) 4に同じ。
- (11) 青野季吉『文学五十年』筑摩書房、一九五七年、一一一頁。

(12) 尾崎士郎、片岡鐵兵、林房雄、葉山嘉樹、横光利一、他三名「新潮合評会第四十五回（三月の創作評）」『新潮』一九二七年四月号。

(13) 鮎川哲也編『鉄道ミステリー傑作集 下り』は「つかり」『光文社カッパ・ノベルス』一九七五年、五六頁。

(14) 瀬沼茂樹「解説」『「文藝市場」復刻版別冊』日本近代文学館、一九七六年、一四頁。

(15) 松谷みよ子「おまえ見たな」『現代民話考（七）学校笑いと怪談』立風書房、一九八七年、三七～三八頁。

(16) 北彰介編『青森県の怪談』津軽書房、一九七三年、一〇七～一〇九頁。

(17) 福岡県立育徳館中学校・高等学校前校長・小正路淑泰氏の談話による。

(18) 日本児童文学者協会編『ほんとうにあつたおばけの話（四）むかえにきた死人たち』偕成社、一九九〇年、一五四頁。

(19) 15に同じ、三九頁。

(20) 「東京都下の私立A中学校の一年生（十二歳～十三歳）を対象に、昭和六十年七月に実施した『妖怪や不思議な話についての調査』に基づくものである。」常光徹「学校の世間話——中学生の妖怪伝承に見る異界的空間——」『昔話伝説研究 第十二号』一九八六年三月。

(21) 浅田隆『葉山嘉樹論——「海に生くる人々」をめぐる』桜楓社、一九七八年、二三頁。

(22) みやこ町歴史民俗博物館所蔵。

(23) 福岡県立育徳館中学校・高等学校前校長・小正路淑泰氏の談話による。

(24) みやこ町歴史民俗博物館学芸員・木村達美氏の談話による。

(25) 個人蔵資料。

(26) 堺利彦「堺利彦伝」（改造社、一九二六年）。引用は『堺利彦全集 第六卷』（法律文化社、一九七〇年、六二頁）に拠った。

(27) 21に同じ、一三頁。

(28) 原田洋将「日本探偵小説文壇における「変格」流行について——大正末期『新青年』読者の視点から」（『言語文化学研究 日本語日本文学編14』二〇一九年三月）。

(29) 『苦楽』一九二六年五月号目次。

(30) 宮本和歌子「江戸川乱歩『闇に蠢く』論」『國語國文』九二二号、二〇一一年六月。

(31) 宮本和歌子「江戸川乱歩『夢遊病者彦太郎の死』における一人二役関係」（『京都大学國文學論叢』第三十九号、二〇一八年四月）。

(32) 江戸川乱歩「幻影城通信」（『宝石』一九四九年七月号）。

(33) 本稿では、乱歩の作品に限定して論じたが、他にも芥川龍之介の「二つの手紙」（『黒潮』一九一七年九月号）、乱歩に影響を与えたと宮本和歌子が主張する（『江戸川乱歩作品論 一人二役の世界』和泉書院、二〇一二年、九四～九五頁）村松梢風の「談話売買処から買った話」（『中央公論』一九二二年四月号）、

「死屍を食ふ男」の執筆時期に発表され、溺死事件から始まる梶井基次郎の「Kの昇天（或はKの溺死）」『青空』一九二六年十月号）等、ドッペルゲンガーなどの一人二役的なテーマを扱った大正文学作品を複数挙げることができる。これらの作品を生んだ時代背景について、更なる研究が必要だと考えられる。

(34) 5に同じ。

(れつきー・りちやーど・ういりあむ／本学大学院博士後期課程)